

広島・郡山城跡（こおりやまじょうあと）
（だいつういん）
 （大通院谷地区）

1 所在地

広島県高田郡吉田町上迫（かみさき）

2 調査期間

一九九六年（平8）一月～一九九九年六月

3 発掘機関

（財）吉田町地域振興事業団

4 調査担当者

新川 隆ほか

5 遺跡の種類

集落跡・官衙関連施設跡・城館跡

6 遺跡の年代

弥生時代～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（八重・可部）

遺跡は、吉田町の中心部、江の川と多治比川の合流する市街地の北東にあたる郡山城の南西麓に位置する。市街地からの比高は二〇～五〇m程で、南西方向に開けた谷地形となっている。調査区はこの谷の東側部分で、約一四〇〇〇㎡を調査した。検出した主な遺構は、一六世紀の郡山城内堀・礎石建物・掘立柱建物・井戸・溝・石垣、古代の大型掘立柱建物・土坑・竪穴住

居、弥生時代前期から埋没が始まる旧河道などで、中世には郡山城内堀のほか毛利氏家臣の武家屋敷、古代では旧高宮郡の郡衙関連施設（本誌第一六号）が存在していたと考えられている。これらの遺構に伴う様々な遺物も出土している。中世では大量の輸入陶磁器・国産陶磁器・土師質土器・金属製品・木製品など、古代では、円面硯・緑釉陶器・墨書土器「乙足」・刻書土器「厨」・漆土器・石帯のほか、大量の須恵器・土師器などが出土している。

今回紹介する木簡は、調査区の東側で検出した石組みの井戸（SE三〇二）の底から銅製の鉄漿付皿と一緒に出土した。この井戸は屋敷の敷地内にあったと考えられ、一六世紀後半の遺構である。規模は、現状で内径約一m深さ一・八mを測る。構造は、上部が円形、下部は方形に石組みされているが、陣木は組まれている。他の遺物としては、中層から出土した息抜きと思われる竹筒の一部や大型の木製杓子などがある。

8 木簡の积文・内容

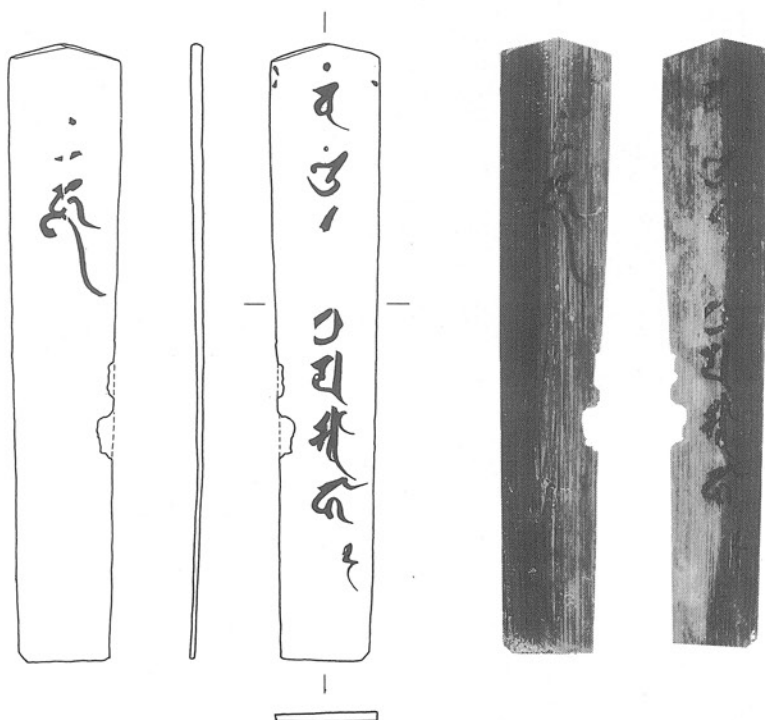
(1) ・「（qカ）」

・「（qカ）」

」

301×54×6 011

長方形の材の先端を圭頭に加工し、表裏に梵字を墨書した御札か呪符と思われる木簡である。表面は中ほどの三文字が判読できないが下の文字がqと推測でき、この文字数、配列で表される真言は水



天を表す「バンオンバロダヤソワカ終止符」しか該当する尊格がない。意

訳をすると「水天に帰命し奉る成就あれ」となる。裏面は「ウン」であるが、これを種字とする尊格は非常に多いため特定することが難しく、一憤怒尊とするに留まる。ただ、仰月点があり、流れバン字に似るスタイルは水との関連を示唆するという。表面の梵字が水の真言とすれば、表裏とも水との関連があり、井戸の底部からの出土ということからみても、井戸に関する祭祀に使用されたものとすることができよう。出土状況から、おそらく井戸の廃棄時に鉄槩付皿とともに埋められたものと思われる。

なお、本木簡の釈読にあたっては、木下密運・渡辺單空両氏よりご教示を頂いた。

(新川 隆)